

長屋の天使

★
一般部門
入選

【奈良県・奥平由美子】

大阪の下町の長屋に住んでいた頃、向かいの部屋に洋子姉ちゃんという看護婦さんがいました。隣りに住んでいた同級生のすみちゃんと騒いでいたら、夜勤明けで寝ている洋子姉ちゃんに「あんたらうるさい」とよく叱られたけれど、宿題を見てくれたり、風邪気味のときには「これが一番」としょうが湯を飲ませてくれたりするやさしい人でした。すみちゃんはお父さんと2人暮らしたつたので、洋子姉ちゃんを本当の姉のように慕っていました。

ある冬の日、隣りから「ガッシャーン！」と何かが割れる音がして「ギヤーツ」と叫ぶ声があったので母と隣りへ飛び込むと、割れたお酒のビンが転がり、すみちゃんが手から血を流して泣いていました。洋子姉ちゃんも、走ってきて、見るなり震えるすみちゃんの手を素早くタオルで包み、しばりました。母が「洋子ちゃん、救急車やな」と言うと、自分が自転車に乗せて行った方が速いと言い、呆然としているおじちゃんに向かって「何してんね

ん、おつちゃん、早よ保険証出さなかいなつ！」と怒鳴りました。「すみちゃん、うちがついてるからな、大丈夫やで」と言い聞かせて、パジャマに半てんをひっかけた格好の洋子姉ちゃんは、荷台に座布団を敷いてすみちゃんを座らせ、彼女の両手をそーつと自分のお腹に回し左手でしっかりと押さえて、勤務する市民病院まで全速力で自転車をこいで行ったのです。

洋子姉ちゃんがいて本当に良かったと思えました。的確で冷静な判断と素早い行動は、彼女のプロ意識と、大きな慈愛の心、そのものでした。

何針か縫って連れられて帰って来たすみちゃんは、白い包帯が痛々しい感じてしたが「これ、洋子姉ちゃんが巻いてくれてん」と少しうれしそうでした。

45年経つた今、みんなどうしているかなあと時々思い出します。少し認知症が進んだ母に「洋子姉ちゃん覚えてる？」と問いかけると、しばらく考えて「自転車乗ってどっか行つた」と言って笑います。